

玩具映画および映画復元・調査・研究プロジェクト（玩具映画プロジェクト）5 映画保存と活用に関して2（国産動画を中心に）

研究年度・期間：平成19年度

研究ディレクター：太田 米男
(映像学科 教授)

共同研究者：中島 貞夫
(映像学科 教授)

志村 哲
(音楽学科 准教授)

学外共同研究者：松本 夏樹
(芸術計画学科 非常勤講師)

森脇 清隆
(京都府京都文化博物館
学芸課 主任学芸員)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

遠藤 賢治
(キヲクサー造形学科 教授)

小山 帥人
(映像学科 非常勤講師)

藤岡 幹嗣

坂本 曠一
(音楽教育学科 教授)

宮島 正弘
(映像学科 客員教授)

安井 喜雄
(フナネット映画資料
図書館代表)

須佐見 成
(株式会社IMAGICAウエストフィルム
事業部 常務取締役・部長)

犬伏 雅一
(芸術計画学科 教授)

上倉 庸敬
(大阪大学文学部 教授)

ジョン・R・バナディ
(ロチェスター大学
Japanese & Film 准教授)

吉川 幸夫
(映像学科 教授)

石原 香絵
(東京国立近代美術館
フィルムセンター)

今年度は、第一のテーマとして、国産動画の保存と活用を中心とした。5月に本学において「日本アニメーション学会」が開催され、それを機に、玩具映画コレクションの内の国産動画群を整理し、検索システムによって、これまでのすべての動画作品を鑑賞して頂こうと計画した。しかし、学会には間に合わず、従来の本学博物館の検索システムとビデオ映写での作品集を見ていただくに留まった。最初の機会を逸したが、今年度も、研究成果を得ることができたので、以下報告する。

① 4月に、国際フィルム・アーカイブ連盟 (FIAPF) 東京会議が、東京国立近代美術館フィルムセンターにおいて開催され、本プロジェクトについて発表する機会を与えられた。FIAPFは1939年に、戦争から映画フィルムを守ろうという意図で設立された非営利団体で、70年以上の歴史を持ち、世界で150ほどの団体が加盟し、映画保存や復元についての規範を示している。今回の会議は、「短命に終わった映画規格」をテーマとしており、玩具映画やナイトレート・フィルムは廃れたが35mmフィルムを使用していたため、現在も復元が可能であり、フィルム保存を提唱する発表となった。70～80年前のナイトレート・フィルムの復元プロジェクトとして評価を得ると共に、各国の初期映画、例えばアメリカは西部劇、フランスはSF、イタリアは史劇、イギリスはドキュメンタリーというように、玩具映画の映像によって日本の初期映画には時代劇映画があることを印象付けることになった。この発表により、本プロジェクトの意義を広く知らせ、理解していただけたことは大きな成果であった。

② 従来からの映画の収集と復元に関しては、新しい協力者も増え、順次復元を行ってコレクションを増やしているが、費用の問題もあり、一時借りのものを優先し、独自で入手したのは、次年度に残している。復元できた主なものには、沢田正二郎の「月形半平太」(連合映画芸術家協会)や「南京街」というアメリカの実写とアニメの合成映画があり、未復元のもの

して「関東大震災、翌日の記録」や尾上松之助の「燃える渦巻」など貴重な映像があり、16mmフィルムはすべて手をつけていない。

③ 9月には、昨年に続き、本プロジェクト提案の「映画の復元と保存に関するワークショップ」を開催した。国立フィルムセンターや京都文化博物館、フィルム会社や現像所の協力を得て、新しく開館した神戸映画資料館と大阪のIMAGICAウエストで開催した。神戸での講義、大阪での現場研修という形で3日間（参加が多く、1日追加し4日間）のワークショップであったが、現像所での専門技術研修という人材育成を目的としたが、映画会社の従業者や博物館の学芸員、映画保存を研究している学者など、専門家の参加が多く、中にはすでに海外で復元を学んでいる留学生も参加してくれ、意義深い情報交流の場となった。「映画復元や保存が欧米から後進にあるとは言え、決して技術が劣っているのではなく、映画に対する文化意識の差、延いては映画保存の関心の低さに原因がある」というのが参加者の共通の認識であった。「日本映画を守りたい」という熱意を持った人たちの参加によって、今後情報交換やネットワークを構築、映画復元の専門家同士の連携や協力によって、本プロジェクトの重要な戦力となるに違いない。今後もワークショップを継続したいと考えている。

④ 11月には、本プロジェクトで復元した17.5mmという特殊規格のフィルム「祇園の山鉦」を京都の祇園会館での一般公開の中で上映する機会を得た。本プロジェクトでの初めての一般公開であり、意義深い催しとなったが、祇園祭山鉦連合会の協力により、山鉦の巡行順や工事中の看板などから、このフィルムが大正2年(1913年)のもの、95年前のフィルムと確認できた。ナイトレートフィルムであり、日本最古フィルムの本一本ということで、貴重な財産ということになる。

⑤ 今後の展開として、学内では、芸大テレビでの公開。ネット配信によって、学外にも玩具映画を紹介する。また、2008年は京都映画祭(復元映画祭)もあり、今後も積極的に、玩具映画の活用を進めて行きたいと考えている。